



結ぶ言築 高レベル放射性廃棄物最終処分場と保存の提案

奨励賞

渡部 亘 (わたなべ わたる)
日本大学 理工学部 海洋建築工学科

JIA全国出品作品



高レベル放射性廃棄物最終処分場と保存の提案
この施設は核廃棄物処分後 10万年もの間残す必要がある。この10万年間に放射性物質が漏れ出す可能性はゼロではない。

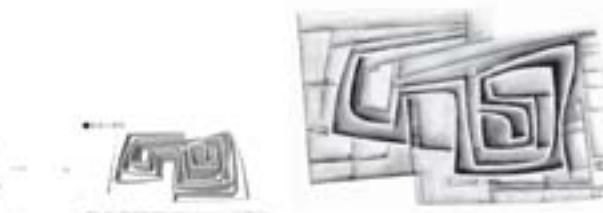
漏れ出す危険性がある以上、今後残された後世の人々にこの危険性を伝えていく必要性がある。

公平性という観点からも日本の首都である東京に計画し我々国民全体で見守り、後世に伝え残すべきである。

核廃棄物処分後、最終処分場跡地に10万年先の後世への正確なアーカイブを目的とした言語保存センターを計画する。

短期、中期、長期保存の観点から碑文、書物、電子媒体という多様な方法で保存することで時間軸による変化に対応させる。

この建築を、はじめて目にしたとき鋭利な刃先を突きつけられたごとく心に緊張感を感じた。大震災・原発事故後の今を生きる人々が避けては通ることのできない、核の問題である。



この建築を、はじめて目にしたとき鋭利な刃先を突きつけられたごとく心に緊張感を感じた。大震災・原発事故後の今を生きる人々が避けては通ることのできない、核の問題である。

この命題に、作者は10万年先まで残すという空前絶後の時間軸をこの建築に与えた、、しかも東京に作るという。

ものすごい壁量をもった、空間に押し行っていく、ザラザラした壁面、何重にも壁に覆われた空間構成は闇の暗さを増食させわれわれの恐怖と不安を見境なく飲み込む、、。

便利さや経済性を優先し、見失っていた物、心底よりの叫び、様々な思いが、交錯する。やがて光と影に導かれる様に

この塊の懐、碑文の間に入る、天空から注ぐ柔らかな光は荒々しい表情を持つ壁面を陰礼を持って包み訪れた人々の表情を一変させる。やわらかい光だ。

この建築が持つ、深い精神性は、将来に渡り継承（結ぶ）されるべきであり「人間が生きる」ということの哲学的意味をもこの空間との対話を通して、作者が問うている。

そして

「なぜか、その光は碑文を照らしていない、、。」

この建築に捧ぐ

（審査委員：信太 義晴）

